

物語文を多面的・多角的に読み取ることができる生徒の育成

—副教材を用いた表現の工夫や特長に着目する活動を通して—

特別研修員 国語 小久保 佑亮(高等学校教諭)

目指す生徒像

物語文を多面的・多角的に読み取ることができる生徒

着眼点を増やして読んでみると、小説って面白いな！



この風景や人物の描写が、結末とこんなふうにつながっていると思うな！

主教材『ひよこの眼』の結末を予想する活動

○幹生のジャケットの中で手を握り合う
主人公と幹生がこれから二人で助け合っていくことの象徴だから、二人は付き合い、結婚する

○夕焼けのシーン
夕日は復活の象徴だから幹生が抱えている問題が解決し、二人は付き合い合う



何をどう読み取ればいいのか分かってきたぞ！

副教材(マンガや映画)を用いて読み取る活動

- 〈マンガ〉生徒が着目したイラスト
- 例1) 玄関にあるごみ袋
ごみ袋＝登場人物の末路を表している(捨てられてしまう)
- 例2) 玄関にあるバラバラに置かれた靴と整頓されて置かれた靴
登場人物二人の性格不一致の象徴である



Case1
「風景描写」
「語り手の視点」
に着目させるためにマンガを用いる

ストーリーが理解できれば十分でしょ。小説の面白さが分からないな…

・言葉やセリフ以外の表現技法
・語り手の視点や場面の移動
・表情や仕草の意味

伏線から想像される
結末を考えてみる



手立て 単元の終末において、副教材(マンガや映画)を用いて、次のような点に着目させる

- 二人が未来を語る場面が夕暮れ
これから暗くなるから二人にとってよくないことが起こる
- 回想の語り口が淡泊になっている
主人公にとって幹生は過去の人間になっているから、幹生が主人公の前から姿を消してしまう

マンガも映画も小説も様々な側面から考えてみると、とても面白いのね！



- 〈映画〉生徒が着目したシーン
- 例3) コーヒーカップの底が乾いているシーン
長い時間待たされていることを表している
- 例4) 机にこびりついた汚れを何度も拭き取ろうとするが全く落ちないというシーン
過去に負った傷は、なかなか消し去ることができないことを表している

Case2
「風景描写」
「語り手の視点」
に着目させるために映画を用いる



先生は「作者の表現の工夫にまで目を向けなさい」と言うけど…

生徒の実態

表現の工夫や特長にまでなかなか意識が向かない

成果

- 副教材にマンガや映画(という視聴覚教材)を取り入れたことで、「風景描写」や「語り手の視点」という着眼点が強化された。
- 副教材を取り入れたことで、生徒は表現の工夫や特長だけでなく、その表現の効果まで考えられるようになった。コンテキストを基に、様々な側面から自分なりの読みを形成することができた。

課題

- △主教材の内容や単元のねらいから逸脱しない副教材を選択することは難しく、副教材を用いた活動を2～3時間入れてしまうと、肝心の主教材の展開や既習した内容を忘れてしまう可能性がある。
- マンガや映画を副教材として用いる場合には、「その単元でどのような力を身に付けさせたいのか」を常時生徒に意識させる工夫が必要である。